

はなかわの風

HANAKAWANO-KAZE
地域連携相談センター広報誌

- 平成24年10月5日発行
- 発行人：星野充明
- 編集長：綾部潤和
- 企画・制作
花川病院地域連携相談センター
地域連携課



患者さんと一緒に楽しいひとときを 感謝祭を終えて



9月17日、敬老の日にちなんで花川病院では『感謝祭』を開催いたしました。今年で3年目の取り組みですが、入院患者さんとご家族にとって生きている喜びを実感出来る一日になるよう、職員が心をこめて多彩な催しを企画しました。

感謝祭の目玉は、ご家族と一緒にの会食。当院自慢のフレンチシェフが、みなさんのために腕をふるいました。今年のメニューは、「トマトのファルスラビゴットコンソメジュレ添え」「バイ貝のブルギニオン風」「パスタ入り野菜のスープ」「サーモンの蟹クリーム詰めソースアメリカーナ」「クリーム・ドゥ・ブリュレ」でした。味付けも濃過ぎず、固過ぎず、食べ易さにも配慮した、高齢者にやさしいあっさりフレンチがとても美味しかったです。

「最近レストランでお食事する機会もなかったので、久しぶりに良い気分でした。」との感想もいただき、特別な一日を感じていただけたようです。



午後は、1Fロビーで「ありがとうカフェ」がオープン。今年のテーマは「世界をめぐる冒険～global tour～」。世界各国の置物や絵本、楽器などの展示や、世界6カ国の紅茶やコーヒーをご用意しました。あたたかい言葉を葉っぱに書いて貼っていただいたメッセージツリー、秋の果物やハートなどを巧みに仕上げるバルーンアートなどを、お孫さんと一緒に楽しまれている姿をみることが出来ました。



5F患者食堂では、琉球太鼓のサークル『夢鼓道 大地21』の演舞や職員によるYOSAKOIがありました。両チームのコラボでは、観客も鳴子を持ち、会場がひとつになって盛り上がりました。

15時までの短い時間でしたが、患者さんお一人お一人の心に残る感謝祭であったなら嬉しいです。（当瀬 恵）



花川病院のホームページ

<http://www.hanakawa-kyouseikai.or.jp/>

石狩市花川南7条5丁目2番地 (0133) 73-5311

2025年問題に備えて

リハビリ病院の使命、地域リハビリテーション活動

◆2025年問題とは?

『2025年問題』というキーワード、ご存知ですか?

2025年には、すべての団塊世代が75歳以上の後期高齢者に達します。そのとき日本は、75歳以上の人口割合が18%を超え、認知症高齢者、単身・夫婦のみ世帯の高齢者が激増すると予想されています。少子化の影響でこの状況を支える世代も減っていく上、当然ながら、高齢者の死亡者数も増加しますので、現在のような病院や介護施設中心の体制では、2025年以降の日本の医療・保健・福祉を支えることは出来ないと考えられます。そこで期待されているのが「地域包括ケア」の考え方。地域の力で地域を支えていくための施策です。

◆花川病院が取り組む「地域リハビリテーション活動」



石狩地域リハビリテーション推進会議総会の様子

この2025年問題は、この石狩の地にも間違いなく押し寄せます。石狩市にあるリハビリ病院として私たちも「何かをしなければいけない」と感じています。というのも、花川病院を退院される方を見てみると、急性期病院での治療を終えられて、当院で3~6ヶ月一生懸命リハビリテーションに取り組まれても、発症以前と同様の身体機能まで回復できる方は稀であると言えます。むしろ、何らかの障がいを抱えながら、ご自宅へ戻られる方が大半です。障がいがあるから、高齢だからという理由で、住みなれた地域に戻れないとしたら、回復期リハビリテーション病院としての機能が果たせなくなってしまいます。

在宅復帰率70%以上を維持していくためにも、当院から退院されてからの生活にも目を向け、「地域で支える街づくり」にかかわっていくことが重要と感じていました。

実は私たちは平成20年より「石狩地域リハビリテーション推進会議」の事務局と「石狩地域リハビリセンター広域支援センター」を担っています。この活動は北海道の事業であり、石狩リハビリテーション推進会議は平成18年12月に道内18番目の指定を受けて誕生しています。

地域リハビリテーションとは「地域において、障がいをもつ人々や高齢者および、その家族が、住みなれたところで、そこに住む人々と共に、一生安全に生き生きとした生活が送れるよう、医療・保健・福祉及び生活に関わるあらゆる人々がリハビリテーションの立場から協力しあって行う活動のすべて」と定義されています。この活動を通して、まさに私たちが今取り組んでいるこの事業こそ、この石狩での「地域包括ケア」を実現するための大切な活動であることがわかってきました。だから「リハビリテーション病院が取り組む使命」と感じているのです。

◆「石狩市」と「石狩圏域」

石狩地域リハビリテーション推進会議は、石狩圏域5市の地域懇談会に分かれて活動しています。江別保健所管轄の江別市と石狩市、千歳保健所管轄の北広島市・恵庭市・千歳市にそれぞれ活動の母体となる地域懇談会を設置

し、各市の実情を把握し、問題解決に向けたネットワークづくりや活動支援をしています。

私たちは「広域支援センター」として、江別・千歳保健所とともに5市の地域包括ケア体制づくりのコーディネーターを行っています。同時に、石狩市の地域懇談会の企画メンバーとして綾部と当瀬、そして医療ソーシャルワーカーの富居潤一が参加しています。「石狩市」と「石狩圏域」両方に関与しているわけです。



石狩市地域ケア会議での事業所プレゼン大会

「石狩市」の活動では、医療・福祉・介護に携わる人々や住民が、まずはお互いの顔が見える関係となって、ネットワークを構築することができるように、事業所のプレゼンテーションなどを行う企画・運営に協力しています。また石狩市の大きな地域問題として、病院のネットワークができていなかったことについて、各病院の医療ソーシャルワーカーと話し合い、病院間のメーリングリストを作ったり、各病院のイベントや研修会などで交流したりと、連携強化に取り組んでいます。

「石狩圏域」の活動では、各圏域と専門職団体からの代表者からなる「代表者会議」の運営、5地域の活動報告をとりまとめ、運営の相談や活性化するような働きかけなどを保健所とともにを行っています。

◆一緒に悩み、一緒に考える仲間がたくさん！

石狩圏域では年に1回、5市合同の研修会を行います。今年度は、『あなたの街の弱点はなんですか？～石狩圏域の相互連携を考える～』をテーマに、江別市で開催しました。抱えている問題に共通性を見出しにくい石狩圏域5市が連携していく必要が本当にあるのか？という思いの中での討論会でした。しかし話し合ってみると、自分の地域にない社会資源を隣の街で補えたり、社会資源のみならず「まちづくりのノウハウ」を共有することができたり。地域が抱えている問題や環境、資源に違いがあっても、お互いで支えあうことができる、と確認できました。そして何より、各地に私たちの仲間がたくさんできました。同じ目的をもった仲間がいて相談したり、励まされたりする場がある、それぞれの取り組みが刺激となり、次の活動のヒントやエネルギーになっている。そこで活動している人々が元気であれば、住みよい街づくりに向けての活動を楽しく続けられる。そんな思いが高まってきています。



石狩地域リハビリテーション推進会議全体研修会

◆地域リハビリテーション活動の拠点として

地域住民で支えあい、助け合うしくみづくりが求められている中で、地域の力を有機的に結びつけていくこと、そして地域力を高めていくこと。そこに助け合いのしくみが生まれ、地域で支え合える環境が整っていく…そんなまちづくりができるように花川病院はこれからも地域リハビリテーションの活動の拠点として、事務局の役割を果たしていきたいと考えています。この地域で安心してらせる仕組みを作るために、みなさんもぜひお力をお貸しください。（当瀬恵 綾部潤和）

健育会メディカルグループ 理事長賞



お見舞いメール・患者さんにご家族の思いをつなげて

医療法人喬成会花川病院が加入する健育会メディカルグループでは、グループ病院・施設の全職員を対象として、「日常業務、非日常業務を問わず質の向上に著しい貢献をした職員に」理事長賞が授与されます。

平成 24 年 5 月度の理事長賞を、花川病院地域連携相談センターのボランティアコーディネーター 石黒喜代美が受賞しました。

花川病院のホームページから「お見舞いメール」を申し込むことができることをご存知ですか？ なかなか来院できない遠方のご親族などからたくさんのお申し込みをいただいているのですが、その受付窓口をしているのが石黒です。

いただいたメールはご希望の台紙に貼付し、ご本人のもとへと届けられます。お届けするのは担当の医療ソーシャルワーカーですが、石黒はお渡しする場面の写真撮影をします。ご依頼主には必ず「お見舞いメール完了」のご連絡を差し上げるのですが、石黒が理事長賞を受賞した理由はここからの動きです。

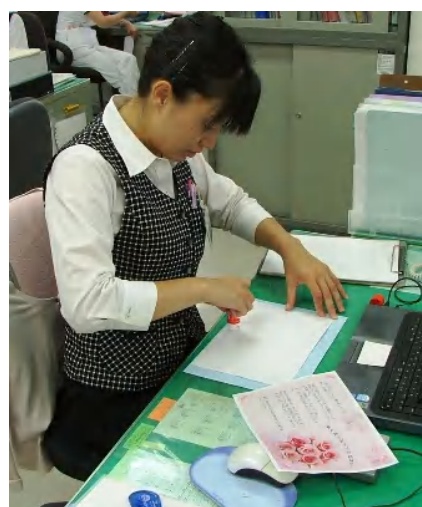
「ありがとうございます。うちの子供たちはみんな優しく、よく電話をくれるんです。」と、嬉しそうにお話してくださいました。「左手が上がるようになって、着替えができるようになりました。少しずつ回復しています。」と伝言をお預かりしました。」などのように、石黒はお渡ししたときの患者さんの様子や表情、伝言を交えた言葉を写真に添えて完了報告をしました。

「最初は、電報やメモのようにメッセージが届くと思っていましたが、思わぬサービスに感激しました。」「思いがけない母の写メが添付されていて皆様の優しさに胸がいっぱいです。」ご依頼いただいたご家族よりこのような反応も返ってくるようになりました。

ただメッセージをお届けするだけでなく、患者さんにご家族の気持ちをつなげることをこの事業の目的と捉え、豊かな時間が提供できるようとりくむことで、リピーターも増え、お見舞いメールの実績数も上がりました。

石黒は言います。「メールをお渡ししたときに見せる患者さんのうれしそうな顔を見るのが楽しみです。あたたかな気持ちをおすそ分けしてもらっているような感じかな」

(綾部潤和)



編集後記

感謝祭のイベントのひとつとして、メッセージツリーを作りました。「ばあちゃんへ。早く元気にびょうきをなおしておうちにかえってきてね」「じいちゃんへ。早く元気になってまたあそんでね」「もうすぐ退院だね。リハビリがんばったもんね。もうちょっとだからがんばって」…メッセージが書き込まれたたくさんの葉っぱで大きな木ができあがりました。みなさんの手書きのあたたかいメッセージをよみながらほっこりした気持ちになっています。ところで、この「はなかわの風」も足掛け5年、通算20号となりました。いつもご愛読、ありがとうございます。

(綾部潤和)